

報告

公民館での地域看護学実習に関する調査報告 －看護学生と交流を図った地域住民へのアンケート結果より－

中島理恵¹⁾・津留響子¹⁾・田淵靖子¹⁾・辻奈美¹⁾・入部さつき¹⁾・疋田理津子¹⁾

1) 純真学園大学 保健医療学部 看護学科

Survey Report on Community Nursing Practice at Community Centers

- Based on a questionnaire survey of local residents who interacted with nursing students -

Rie Nakashima¹⁾, Kyoko Tsuru¹⁾, Yasuko Tabuchi¹⁾,
Nami Tsuji¹⁾, Satsuki Iribe¹⁾, Ritsuko Hikita¹⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University

要旨：本研究は、公民館での地域看護学実習で、公民館事業に参加している地域住民が看護学生との交流を図ったことについての感想等を調査し、地域・大学協働学習連携システムの構築を目指すための今後のあり方を検討するための基礎資料とした。方法は、地域看護学実習を行う福岡市内の21公民館において、公民館主催事業に参加し看護学生と交流があった地域住民に質問紙調査を行った。看護学生との交流による感想、地域活動や大学に対する要望等について、無記名自記式質問紙調査を実施した。その結果、19公民館、698名（回収率63.5%）より回答を得た。地域看護学実習での看護学生と地域住民との交流では、「楽しかった」、「元気をもらえた」、「若者を育てたい」等の項目で肯定的な回答が得られた。結論、地域看護学実習での地域住民との交流は、学生が地域とつながるきっかけになると同時に、地域の高齢者のジェネラティビティに寄与する可能性が示唆された。今後、地域からも期待されている学生の主体的な地域活動へと発展させていくためには、サークル活動等の立ち上げ等を通じた学生間の学年横断的なつながりの創設と共に、過密カリキュラムの緩和等の検討も併せて考える必要がある。

キーワード：地域看護学実習 公民館 看護学生 地域住民 交流

Abstract: This study aimed to provide foundational data for investigating local residents' impressions of their interactions with nursing students during community nursing practice at community centers. Additionally, it considers potential strategies for establishing a community-university collaborative learning system. A questionnaire survey was conducted among local residents who participated in a community center project and interacted with nursing students. The survey was anonymous, self-administered, and focused on their impressions of the interactions with nursing students as well as their requests for community activities and university involvement. Responses were collected from 698 participants (response rate: 63.5%) across 19 community centers. Conclusion: Interactions with local residents during community nursing practice provide nursing students an opportunity to engage with the community, while also contributing to the generativity of elderly residents.

Key words: Community Nursing Practicum, Community Center, Nursing Students, Local Residents, Exchange

1. 緒言

わが国では超高齢社会、家族形態の変化や社会生活の変化により、核家族化や少子化に伴い地域でのつながりや世代間の分離が問題視されている¹⁾。つまり、地域のつながりが希薄化している昨今、地域住民との交流の活性化を図り、地域包括ケアシステムや地域共生社会の実現が喫緊

の課題である。文部科学省²⁾は、「大学（短期大学を含む）は、大学の使命として、地域や社会の知の拠点として、住民の生涯学習や多種多様な主体の活動を支えると同時に、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値の創造への積極的な貢献が求められている」と明文化している。

本学では、地域住民にとって交流の場である公

民館で、校区の健康推進部・公民館関係者との共同開催「健康フェスティバル」等、地域と大学が連携し協働学習に取り組んできた。しかし、地域と大学が連携し協働学習を持続していくうえで、地域の協力者の固定化・高齢化や、参加メンバーの減少、内容のマンネリ化等³⁾、の課題も浮き彫りとなった。そのため正田ら³⁾は、学生と地域住民が地域の学びのプラットフォームである公民館と連携し、看護学実習やボランティア活動等の学習機会を通じて、地域住民と学べるシステム構築を計画し、その第一段階として近隣の公民館へ、大学との協働への関心について調査している。その結果、97%の公民館が大学との協働に関心を示している³⁾ことを明らかにしている。また、正田ら³⁾は、「大学生がボランティア活動や実習の場として公民館を活用する中で、地域の様々な世代と交流を図ることは、地域の活性化につながり、地域コミュニティ活動支援の起爆剤として期待できる」ことを示している。

これらの背景を考慮し、新カリキュラムによって導入された地域看護学実習において、本学では、地域で生活をする人々の理解や地域のつながりについて学ぶこと、また、実習が地域とつながるきっかけになることを目的とし、令和6年度より地域看護学実習の場を地域住民が利用している公民館に一律した。

そこで本研究は、公民館での地域看護学実習において、公民館事業に参加している地域住民が、看護学生との交流についてどのような感想や意見、地域活動および大学に対する要望を抱いているかについて調査することを目的とし、地域・大学協働学習連携システムの構築を目指すための今後のあり方を検討するための基礎資料とする。

2. 方法

1) 地域看護学実習の概要

地域看護学実習は、1年次前期で開講される。実習開始前に実習の詳細について説明し、承諾を得た公民館21か所で実習を行った。実習の概要については、以下に示す。

- (1) 実習期間：令和6年6月3日（月）～令和6年6月7日（金）
- (2) 実習時間：10：00～16：00

※公民館の体制や事業によって実習時間の変更有り。

- (3) 実習場所：公民館21か所に3～7名をグループにして配置する。
- (4) 実習内容
実習のスケジュール例を表1に示した。

2) 調査対象

地域看護学実習を行う本学近隣にある福岡市内の21公民館において、公民館主催事業に参加し、看護学生と交流を図った地域住民。（以下、地域住民）

3) 調査方法

研究者が独自に作成した自記式質問紙調査

4) 調査期間

2024（令和6）年6月～7月

5) 調査内容

(1) 質問項目

先行研究を基に以下の項目を調査した。

- ①基本属性：年代、公民館利用頻度、世帯構成、現在の地域での生活歴の計4項目。
- ②公民館での活動参加への動機、活動に参加して良かったこと、学生との交流についての感想
- ③地域活動や大学に対する要望
- ④感想・意見・質問：自由記載

(2) 調査依頼・回収方法

- ①21公民館の公民館長に、本研究の趣旨を口頭および文書にて説明し同意を得た。同意の得られた公民館の公民館長あるいは主事に、調査対象の地域住民へ研究の趣旨の説明および質問紙の配布を依頼した。
- ②質問紙の回収は、回収箱を公民館内に設置し、配布から2週間の留め置きとした。

6) 分析方法

質問紙の量的データは、単純集計を行い回答者の度数や割合を算出した。質的データである地域住民の感想・意見・質問の自由記述内容は、研究対象者が記述した意味や内容が似ているものを一

表1 地域看護学実習のスケジュール例

日程	午前	午後
6/3	10:00 オリエンテーション 11:00 館長からの話	13:00 スマホ教室 14:30 参加者インタビュー 15:00 学生カンファレンス 16:00 実習終了
6/4	9:00 夏祭り企画 10:00 子育てサロン参加 11:00 参加者インタビュー	13:00 地域協議会役員会の見学 14:00 役員へのインタビュー 15:00 学生カンファレンス 16:00 実習終了
6/5	9:30 ストレッチ体操教室準備 10:00 ストレッチ体操教室 11:30 主催事業開催後の振り返り	13:00 認知症にやさしいまちづくり講座参加 14:00 役員へのインタビュー 15:00 学生カンファレンス 16:00 実習終了
6/6	9:30 健康フェスタの準備 10:00 健康フェスタ開催 11:30 片づけ	13:00 健康フェスタ反省会 15:00 下校見守り活動への参加 15:30 学生カンファレンス 16:00 実習終了

つのまとまりにして、できるだけ研究対象者の言葉を用いて簡潔に本質的な意味を表すように整理した。

7) 倫理的配慮

本研究は純真学園大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：24-06）。研究参加者には、研究主旨、匿名性の保護、研究参加は自由意志であること、参加有無および途中辞退により不利益を被らないこと、投函された質問紙の開封は、学生の成績が確定するまで開封しないこと等について、地域住民が読みやすく且つ、理解しやすい表現を用いて文書で説明を行った。質問紙は無記名・個別投函とし、質問紙に設けた同意欄へのレ印および質問紙の投函をもって研究参加の同意が得られたものとした。

3. 結果

3.1 対象者の属性（表2）

21公民館に依頼した結果、19公民館より研究参加の同意が得られた。また、19公民館に1,100部の質問紙を配布した結果、698名より回答があった（回収率63.5%）。

公民館利用者の年代は、70歳代（39.7%）が最も多く、次いで80歳代（23.4%）、60歳代（13.3%）であり、公民館利用者の77%が60歳代以上であった。公民館利用者の居住年数は30年以上（42.8%）が最も多く、全体の半数以上が20年以上と比較的居住年数が長い人が多かった。世帯構成では、夫婦のみの世帯（38.5%）が最も多く、次いで親と子どもの二世帯（28.4%）、ひとり暮らし世帯（23.4%）の順であった。公民館の利用頻度では、1週間に1回利用（38.3%）が最も多かった。

3.2 公民館での活動参加の動機と活動参加して良かったこと（表3）

公民館利用している地域住民の、公民館での活動へ参加する動機について複数回答で調査した。その結果、「健康維持」（29.2%）、「趣味や教養を身につけたい」（21.7%）、「友だちづくり」（20.1%）の順で多かった。また、公民館での活動へ参加して良かったことでは、「友人・知人との交流ができた」（29.9%）が最も多く、次いで「健康に対する意識が高まった」（23.4%）、「趣味や教養が広がった」（20.5%）の順であった。

表2 対象者の個人属性

						(n=698)	
		n	%			n	%
年代	10 歳代	1	0.1	世帯構成	ひとり暮らし	163	23.4
	20 歳代	10	1.4		夫婦のみ	269	38.5
	30 歳代	27	3.9		親と子どもの二世帯	198	28.4
	40 歳代	21	3.0		子ども・孫との三世帯	26	3.7
	50 歳代	43	6.2		その他	20	2.9
	60 歳代	93	13.3		無回答	22	3.2
	70 歳代	277	39.7	公民館の利用頻度	1 週間に 1 回	267	38.3
	80 歳代	163	23.4		2 週間に 1 回	141	20.2
	90 歳代	7	1.0		1 か月に 1 回	103	14.8
	無回答	56	8.0		2 か月に 1 回	7	1.0
居住年数	1 年未満	13	1.9		3 か月に 1 回	11	1.6
	1 年～10 年未満	137	19.6		6 か月に 1 回	16	2.3
	10～20 年未満	126	18.1		1 年に 1 回	17	2.4
	20～30 年未満	102	14.6		その他	111	15.9
	30 年以上	299	42.8		無回答	25	3.6
	無回答	21	3.0				

表3 公民館での活動参加の動機と活動参加して良かったこと

				(複数回答)	
		n	%		
公民館での活動に参加した動機 (複数回答)	友だちづくり	253	20.1		
	健康維持	368	29.2		
	生活にメリハリをつけたい	231	18.3		
	趣味や教養を身につけたい	274	21.7		
	その他	91	7.2		
	無回答	43	3.4		
公民館での活動に参加して良かったこと (複数回答)	友人・知人との交流ができた	394	29.9		
	友人・知人との輪が広がった	258	19.6		
	健康に対する意識が高まった	308	23.4		
	趣味や教養が広がった	271	20.5		
	その他	31	2.4		
	無回答	57	4.3		

3.3 看護学生との交流についての感想 (表4)

地域住民と看護学生の交流による感想では、「楽しかった」や「元気をもらえた」、「これからも参加したい」、「若者を育てたい」の項目で、70%以上のものが「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答していた。「学生に話を聴いてもらえた」や「若者に対するイメージが変わった」の項目では、70%以上のものが「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答している一方で、無回答のものも他の項目より多い傾向にあった。

3.4 地域活動や大学に対する要望 (表5)

地域活動や大学に対する要望について、6つの選択肢および複数回答で質問した結果、「学生に地域活動に参加してほしい」(36.9%) が最も多く、次いで「学生との交流を続けたい」(18.9%)、「大学や学生に公開講座や交流活動を開催してほしい」(17.3%) の順であった。

3.5 感想・意見・質問 (表6)

自由記述による地域住民からの感想・意見等では、学生との交流や、学生に対するイメージ、学生に対する期待と応援、地域活動参加に関する要

表4 学生との交流についての感想

(n=698)

感想	n	%	感想	n	%
楽しかった			若者を育てたい		
とてもそう思う	380	54.4	とてもそう思う	252	36.1
ややそう思う	214	30.7	ややそう思う	253	36.2
あまりそう思わない	12	1.7	あまりそう思わない	55	7.9
全くそう思わない	3	0.4	全くそう思わない	8	1.1
無回答	89	12.8	無回答	130	18.6
元気をもらえた			大学に対して親近感がわいた		
とてもそう思う	397	56.9	とてもそう思う	268	38.4
ややそう思う	192	27.5	ややそう思う	254	36.4
あまりそう思わない	14	2.0	あまりそう思わない	49	7.0
全くそう思わない	3	0.4	全くそう思わない	5	0.7
無回答	92	13.2	無回答	122	17.5
学生に話を聴いてもらえた			これからも参加したい		
とてもそう思う	205	29.4	とてもそう思う	315	45.1
ややそう思う	200	28.7	ややそう思う	242	34.7
あまりそう思わない	91	13.0	あまりそう思わない	25	3.6
全くそう思わない	28	4.0	全くそう思わない	7	1.0
無回答	174	24.9	無回答	109	15.6
若者に対するイメージが変わった					
とてもそう思う	204	29.2			
ややそう思う	248	35.5			
あまりそう思わない	89	12.8			
全くそう思わない	18	2.6			
無回答	139	19.9			

望等が聞かれた。その中でも、学生との交流についての感想が多く、「若い大学生と交流する機会が出来て楽しかった・嬉しかった」や「楽しく有意義な時間が過ごせた」の記述が多かった。

4. 考察

4.1 看護学生と地域住民との交流について

4日間の地域看護学実習での看護学生と地域住民の交流による感想では、「楽しかった」、「元気をもらえた」、「若者を育てたい」等の項目で、70%以上のものが「とてもそう思う」から「ややそう思う」と回答していた。また、地域住民の自由記述による感想等においても、「若い大学生との交流が楽しい、嬉しい」や「楽しく有意義な時間が過ごせた」など肯定的な感想が多かった。つまり、実習期間や交流時間は短かったが、地域看護学実習により、看護学生と地域住民との交流は

表5 地域活動や大学に対する要望

(複数回答)

要望	n	%
学生との交流を続けたい	242	18.9
学生に地域活動に参加してほしい	472	36.9
大学と協力して学生を育てていきたい	94	7.3
大学の活動内容をPRしてほしい	149	11.6
大学や学生に公開講座や交流活動を開催してほしい	222	17.3
その他	22	1.7
無回答	79	6.2

少なからず促進され、実習後に、実習公民館でのボランティア活動につながったと考える。看護学生と地域高齢者の交流に関する先行研究においても、地域高齢者は「若者から元気をもらえる、楽しい」と、看護学生との交流の効果を報告^{4) 5)}しており、本研究結果と同じであった。本研究では、対象者の7割以上が60歳代以上であり、また、世

表6 地域住民からの感想・意見・質問

		(重複記載あり)
	記述内容	件数
学生との交流 (良かった内容)	若い大学生と交流する機会が出来て楽しかった・嬉しかった	20
	楽しく有意義な時間を過ごせた	18
	学生から元気をもらえた	10
	学生からいろんな話を聞くことができ勉強になり楽しかった	6
	子どもと遊んでもらいありがたかった	5
	学生に話を聞いてもらい嬉しかった	3
	子どもと一緒に遊んでもらい子どもが楽しそうだった	3
	学生と交流して若返ったようだった	3
	学生に見学してもらい教室があかるくなり楽しかった	2
	スマホの事など教えてもらいありがたかった	2
	学生が公民館に来ることは新鮮で良かった	2
	優しく親切に接してもらい嬉しかった	2
	(改善が必要な内容)	
	交流する機会や時間が少なくほとんど話せてない	11
学生に対するイメージ	元気をだしてほしい・おとなしい	8
	もっと話せるようになってほしい	2
	高齢者は耳が遠いため大きな声で話してほしい	2
	明るく素直だった	8
学生に対する期待と応援	とても感じの良い学生	3
	自分の意見をしっかりもって素晴らしかった	3
	礼儀正しかった	1
	多くの社会経験を積み今後の成長と看護師としての活躍を期待	12
地域活動参加に関する要望	将来の担い手であるため健康に気を付けて頑張してほしい	3
	学生と交流できる機会がほしい	11
	地域の行事や活動に若者に参加してほしい	7
	学生に地域活動の企画・運営をしてほしい	1
その他	公民館活動の普及をお願いしたい	1
	高齢者だけでなく子育て関係の講座にも参加してほしい	1
	大学と地域との連携推進を期待	1
	世代ギャップを縮める	1
	今回の交流活動が今後の学生さんたちの学習の役に立てば幸い	1
	何かできることが大切だと感じた	1

帯構成の約半数が「ひとり暮らし」あるいは「夫婦のみ」であることから、日頃より若者世代と交流する機会が少ないことが推察され、このような結果に繋がったと考える。その一方で、学生との交流による感想で、「学生に話を聴いてもらえた」の項目で無回答がどの項目よりも多かった。これは、自由記述の感想・意見・質問にある「交流する機会や時間が少なくほとんど話せていない」ことが要因となったと考える。加えて、その他の項目についても無回答が多かった。その要因として、高齢者を前提とした質問内容になっており、看護学生と同世代の地域住民にとっては、回答が困難であったのではないかと考えられる。次年度以降は、地域住民と学生が交流できる機会や時間確保

の検討と、質問紙の調査内容について再検討が必要である。

上述した地域住民からの肯定的な感想に加え、地域住民からの自由記述では、「今回の交流活動が今後の学生の学習に役に立てば幸い」や「何かできることが大切だと感じた」という感想や意見が聞かれた。これは中高年期の発達課題とされるジェネラティビティ (generativity)⁶⁾ の可能性についても考えられる。ジェネラティビティとは、Erikson (1963) が提唱した人間の生涯の心理社会発達理論であり、中年期・高齢期に必要な要素として「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義した概念⁷⁾ である。Erikson の定義に沿って、McAdams と Aubin は、具体的なジェネラティビ

ティ行動を「次世代への世話と責任」「コミュニティや隣人への貢献」「次世代のための知識や技能の伝達」「永く記憶に残る貢献・遺産」「創造性」という5つの構成要素に整理^{7) 8)}している。さらに、田淵は、若年世代との直接的関わりがジェネラティビティ発達の中核とし、世代間交流により若年世代と接することは、中高年者にとってジェネラティビティ発達場である⁶⁾と述べている。今回、地域住民からこのような感想や意見が聞かれたことは、地域看護学実習で看護学生と交流することで、次世代への継承の必要性をより感受し、次世代を育てる役割を意識する機会となった可能性も考えられる。若年層と高齢者における交流では、精神的健康が良好⁹⁾になること、看護学生との交流では、高齢者側の活力に繋がるだけでなく、看護学生側においても高齢者への理解が深まる⁴⁾などが示されている。これらのことから、地域看護学実習における看護学生と地域住民の交流は、看護学生と地域の高齢者が相互に学ぶ機会となっていることが示唆された。

4.2 看護学生および大学への期待について

本研究において地域住民は、学生の地域活動への参加や、学生との交流を継続、大学や学生に公開講座や交流活動の開催を要望していることが明らかとなった。

「地域づくり」「人づくり」の中心的な役割を果たしている公民館の課題として、森下は、公民館利用者の年齢層に偏りがあり、10歳代、20歳代は極端に少なく、30歳代から徐々に増えるが、主たる年齢層は60歳代以降で56.6%を占め¹⁰⁾、永野は、公民館利用者の8割が60歳代¹¹⁾と報告している。つまり、本研究で、地域住民が学生の地域活動参加を最も要望していた理由として、若者世代とのつながりが希薄化している昨今、住み慣れた地域が衰退化し、地域活動の担い手不足を危惧すると同時に、未来の地域活性化を願っているからではないかと考える。正田ら³⁾の大学生の公民館事業への参加方法や参加を希望する活動のタイプに関する調査では、大学生の視点から、公民館事業を企画・運営からの参加を希望する公民館が多く、参加を希望する活動のタイプでは、活動対象が高齢者の場合では健康支援や学習支援を希望してい

た。現在、本学では地域貢献の一つとして、校区の健康推進部・公民館関係者との共同開催「健康フェスティバル」³⁾や公民館主催事業への学生ボランティアの参加スキームを整理し、令和6年度10月現在ボランティアに参加している学生は、120名以上に増加している。しかし、これらの活動はボランティア単位を取得するための受動的行動にとどまっている側面も否定できない。今後、地域住民のニーズに応じた地域活動を学生が主体的に企画・運営する実践力をつけていくには、まずサークル活動等を通じた学年横断的な学生間のつながりが必要と考える。本学の特色は、看護学科の他にも放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科がある。よって、他学科の学生と協働し、より専門的な健康支援や地域活動への参画も実現可能ではないかと考える。

4.3 地域・大学協働学習連携システムの構築を目指すための検討と課題

以上のことから、看護学生と地域のつながりにおいて、一時的な交流で終わらせるのではなく、交流を持続させるための方策について検討していく必要がある。

今後、公民館での地域看護学実習の継続と、学生の公民館でのボランティア活動の主体的継続は車の両輪であると考え。現在、本学の建学の精神の一つである「奉仕」に基づき、全学科ボランティアが教育カリキュラムに組み込まれ、必修科目となっている。地域看護学実習をきっかけに実習に行った公民館へ行き、ボランティア活動に参加している看護学生の増加のみならず、他学科の学生も公民館でボランティアが可能な事を知り、公民館でのボランティア活動に参加学生が全学的に増加している。

一方、大学生を対象としたボランティアに関する調査^{12) 13)}では、ボランティアに参加しない学生について、「時間がない」という理由が多いことを報告している。大学生の時間的な余裕のなさは、履修科目数とそれに伴う課題、アルバイト、大学生活などによって時間的な余裕がないのではないかと推察される。また、本学の看護学科においては、学年が進むにつれ、基礎教育科目から専門教育科目へと学習内容が深化していき、3年次生

の後期からは各領域実習が始まる。そのため、より時間的余裕がなくなり地域交流の持続は困難になることが予測できる。したがって、学生と地域のつながりを持続させていくためには、時間的余裕の確保の観点から教育カリキュラムの見直しも視野に入れた検討も今後必要と考える。

さらに、「単位取得のためのボランティア」から「主体的なボランティア」へと発展させていくための方策について、現在、試験的に地域看護学実習を経た看護学生を主とし、地域交流活動のサークルを立ち上げることを検討している。石川ら¹⁴⁾の看護系大学生を対象とした課外活動と社会人基礎力との関連については、サークル活動でチームワーク力を構成する要素が育まれ、ボランティア活動では、主体性、課題発見力、計画力などが養われることを示唆している。すなわち、地域交流活動に関するサークルを立ち上げ、ボランティア活動を行っていくことは、社会人基礎力を高めることにも繋がる可能性があり、主体的な地域交流活動への参加に繋がるのではないかと考えられる。以上のことから、看護学生と地域のつながりにおいて、一時的な交流で終わらせるのではなく、交流を持続させるための方策について検討していく必要がある。

5. 結語

地域看護学実習における看護学生と地域住民との交流では、地域住民から、「楽しかった」、「元気をもらえた」等の項目で肯定的な感想が多く聞かれ、公民館での地域看護学実習の継続の必要性が示唆された。今後、地域からも期待されている学生の主体的な地域活動へと発展させていくためには、サークル活動等の立ち上げ等を通じた学生間の学年横断的なつながりの創設と共に、過密カリキュラムの緩和等の検討も併せて考える必要がある。

引用文献

- 1) 草野篤子. “インタージェネレーションの必要性”. 現代のエスプリ—インタージェネレーション—. 444, 東京, 2004, 至文堂, P.5-8.
- 2) 文部科学省. “開かれた大学づくり”. 2012-2, https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/daigaku/index.htm (2024-04-26)
- 3) 正田理津子, 濱田維子. 持続可能な地域・大学協働学習連携システムの構築をめざして—大学近隣公民館への大学協働に対する関心度調査の結果と今後の展望—. 純真学園大学雑誌, 2024, 14, P.77-82.
- 4) 林裕栄, 武田美津代, 張平平, 他. 地域高齢者と看護学生の世代間交流に関する研究. 保健医療福祉科学, 2017, 7, P.59-65.
- 5) 馬場保子, 中村美香, 山口智美, 井上晴久. 学生と地域をつなぐプロジェクト—高齢者ケアに関するボランティア活動の実践報告—. 活水論文集, 2020, 6, P.18-23.
- 6) 田淵恵. “中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差—世代間交流とジェネラティビティの視点から—”. 生老病死の行動科学. 大阪大学大学院人間科学研究科臨床死生学・老年行動学講座, 2009, 14, P.3-12.
- 7) 崔恩熙. 理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点—高齢者への効果と中心とした文献レビュー—. 日本福祉大学大学院 福祉社会開発研究, 2019, 14, P.17-11.
- 8) Aubin, Ed de St.; McAdams, Dan P. The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/happiness with life, and ego development. *Journal of Adult Development*, 1995, 2, P.99-112.
- 9) 根本裕太, 倉岡正高, 野中久美子, 他. 若年層と高齢層における世代内／世代間交流と精神的健康状態との関連. 日本公衆衛生雑誌, 2018, 65 (12), P.719-729.
- 10) 森下一成. 地域づくりの拠点としての渋川市公民館の役割その1 公民館利用者に関する調査報告. 上武大学ビジネス情報学部紀要, 2016, 15, P.5-21.
- 11) 永野ひとみ. 公民館利用者における学習活動・地域活動と社会貢献意識. やまぐち地域社会研究, 2013, 11, P.65-78.
- 12) 音成陽子. 大学生のスポーツ・ボランティアのあり方. 流通科学研究, 2017, 17 (1), P.25-38.
- 13) 松宮朝, 石井晴雄, 川原千香子, 他. 大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題—長久手市4大学学生ボランティア調査から—. 共生の文化研究, 2018, 12, P.26-47.
- 14) 石川美智子, 板倉朋世, 松本明美. 看護大学に在籍する学生の課外活動と社会人基礎力との関連性. 獨協医科大学看護学部紀要, 2014, 7, P.11-21.